

は
じ
め
に

第1章 笹倉の庭

成城の家 笹倉の庭に鷺草が

鷺草の鷺二羽となる娘に甘え

相川の最後の夏

魂迎ふ一人となりて古家守る

手ごなしで土をかぶせる秋の種

十指もて土をかぶせる秋の種

豪雷にいさかふ妹弟抱き合ふ

不二子のノート

亡娘ノート紙魚しみ生きている悲しさよ

上野城 百合子出品を見に行く

風涼し天主の床の黒光り

双適
57
・
7
・
0

57
・
8
・
0

57
・
8
・
0

57
・
8
・
0

57
・
8
・
0

57
・
9
・
0

59
・
8
・
0

俳聖殿忍者屋敷も蟬しぐれ

百合子の看病の日を思ひ

看とりつつ句帳かた辺に長き夜

看とり女にある秋晴や特選句

編者注

百合子が夫栄介の看病で

「点滴の窓を祭りの鉾過ぎる」

が伊賀上野の句会で特賞に選ばれた

祭太鼓看とりの窓に遠くきく

安眠なき看とりの夜々に虫親し

笹倉光雄さんと食事 新宿「かも川」で

酌みもして婿の気配り涼しき餉

成城笹倉にて

中古車群旗はたはたと春を呼ぶ

猫柳活ける娘もまたつやつやし

花葉挿しふと京の友思ひけり

6 6 6
・ ・ ・
2 2 2
・ ・ ・
0 0 0

4
・
7
・
0

62 62
・ ・
10 10
・ ・
0 0

62 62
・ ・
10 10
・ ・
0 0

59
・
8
・
0

第2章 母お気に入り句

端居して出世無縁の長寿眉

19607

この句は四国の故郷で読む故郷は香川県高松市国分 で、従弟の村上勝美宅を宿としていた。そこで村上勝美氏の眉を読んだ句。京鹿子の特選賞となり、数ページの誉め言葉があった。端居の季語は夏である。

初入日三六六の一を呑み 19601

三六六は閏年からくる。1966年は閏年だった。ひねった句。

臘夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 1930400

四国高松で従弟の村上久夫さんに 鯛の兜煮 をご馳走になった。骨までしゃぶる は京鹿子の海道主宰から手紙で「骨までしゃぶる 全く感心いたしました 故郷はよいもの 良」と。故郷のあるものは倅ですね と

啓室やシルバーホームの預け解け 1997/03

1997年2月に。私と喜美子と清子さんの3人で ドイツ デュッセルドルフの郷生のマンションに10日間泊った。その間 母を湘南台の老人ホームに預けた。その帰国が丁度〓月上旬だったので。

春暁の正夢なれや初ひ孫 1997/03

清子さんが千里を懷妊したとの知らせをめでて。